【314】

氏　名（本籍）	梶（かじ）　孝之（たかゆき）（大阪府）
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博　甲　第　5128　号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**ハワイ日系移民のスポーツ活動に関する研究** －布哇殖民新聞，布哇報知，Honolulu Advertiser を手がかりとして（1908-1941）－

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	阿部生雄
副　査	筑波大学教授	博士（体育科学）	近藤良享
副　査	筑波大学准教授	教育学博士	清水　諭
副　査	筑波大学教授	Ph. D.（文学）	竹谷悦子
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	谷川彰英

論文の内容の要旨

（目的）

この研究の目的は，日本人の移民が「出稼ぎ」,「定着」,「永住」という過程を経てハワイの「日系人」へと形成されるにあたり，スポーツ活動がどのような役割をはたしたのかを明らかにすることにある。

（研究方法）

本研究では（1）1885年－1908年を日系移民が出稼ぎを主な目的として移民した「出稼ぎ時代」,（2）1908年－1924年を日系移民を制限する日米紳士協定（1908）以後，家族や花嫁を呼び寄せることしか移民が認められない中で定着を余儀なくされる「定着時代」,（3）1924年－1941年を排日移民法（1924）によって日本人の移民が全面的に廃止されて永住を余儀なくされた時から太平洋戦争が始まるまでの「永住時代」という時期区分を採用する。本研究では，1908年から1914年までの定着時代前期のスポーツ活動を『布哇殖民新聞』から分析し，1914年から1924年までの定着時代後期と，1924年から1941年までの永住時代のスポーツ活動を『布哇報知』によって分析する構成をとった。尚，新聞記事の量的分析，内容分析は日本新聞協会調査課の「新聞紙面の解剖一昭和三十六年度秋季」を参考にした。

（考察）

第1章「日系移民へのスポーツの普及」では，主にハワイの移民史や先行研究をもとにして考察し，スポーツは移民当初から盛んに行われていたこと，プランテーションにおける労働者対策としてスポーツが導入されたこと，仏教の修養団体や日本語学校，日曜学校を基盤としてスポーツが組織されたこと，県人会における行事や社交の場でスポーツが行われていたことを明らかにした。第2章「定着時代前期のスポーツ（1908-1914）」では，日本で人気のあった野球と相撲の記事が多く，スポーツ活動は日本の年中行事にあわせて行われ，仏教団体等の行事と結びついていたこと，新聞で特に大きく取り上げられた記事にはマラソンの塚本宗七と早稲田大学野球部の遠征試合があったこと，この時期には日系人が日本の伝統スポーツに傾斜する傾向，日本の伝統スポーツとは異なる野球やマラソンを通じて「日本人」としての同朋意識を高揚させ，「白

人」に対する「異化」の姿勢を確認する傾向が見られたことを明らかにした。第 3 章「定着時代後期のスポーツ（1914-1924）」では，相撲や野球などの人気スポーツが行われる一方，日系人のゴルフや庭球への参入等，日系人の「白人」社会に対する歩み寄りが見られたこと，天長節に行われた運動会の種目にハワイ独特の種目が導入されるようになったこと，第一次世界大戦以降に高まった排日気運の中で，東京大相撲は日系人の大きな関心事となっており，また異種格闘技試合には日系人対「白人」という挑戦形式が柔術や相撲や拳闘で見られた。排日移民法の制定が近づくにつれ，日系社会の「人種化」,「日系人化」が進行したものと考えることができる。第 4 章「永住時代のスポーツ活動（1924-1941）」では，1920 年代に見られたアメリカ本土のスポーツ報道が 1930 年代にはほとんど見られなくなったこと，天長節にあわせて行われていた運動会が世俗化して園遊会に変質したこと，次第にクリスマスや独立記念日に行われる日系人の蹴球，拳闘，野球の試合を報道するようになったこと，異種格闘技試合では，次第にアメリカ本土でレスリングやボクシングを学んでくる傾向が見られたことを明らかにした。永住時代には，排日移民法の施行と戦時体制への移行という時代を背景に「日系人」は日本とのナショナリズム的関係性を保とうとしつつ，アメリカ社会に同化を余儀なくされる状況に追い込まれた。こうした中で，スポーツ活動は「日系人」として彼らがハワイに定着する上で，一定の役割を果たしたことが明らかとなった。第 5 章「『Honolulu Advertiser』にみる日系移民のスポーツ活動（1908-1941）」では，日系人の新聞では取り上げられていないスポーツ活動を見出すことができたこと，1914 年から 1924 年にかけては「白人」中心のスポーツ活動が増加し，1924 年から 1941 年にかけては日系人のスポーツ活動に関する報道が増える傾向が見られたこと，日本の年中行事と結びついていた相撲，剣道などのスポーツ活動は報道されなかったこと，1908 年から 1914 年まで，同紙では日系移民を「日本人」と表現していたが，1914 年以後，次第に「日系人」と表現するようになったことを明らかにした。1914 年を契機として，アメリカ本土の「白人」が軍事目的で，ハワイに移住し始めたことから，日系人のスポーツ活動に大きな変化が現れ始めたことを明らかにした。

（結論）

日本人が最初にハワイに移住してから，定着時代前期，定着時代後期，永住時代を通じて，活発にスポーツ活動が行われていたことが確認できた。ハワイ日系移民のスポーツ活動の独自の時期区分は 1908-1914，1914-1924，1924-1941 に区分することの可能性を見出した。日系人は日本的な文化を継承すると同時に，アメリカ本土のスポーツ活動にも関心を抱いていた。そのような状況の中で，彼らは「日本人」として，また「日系人」として自らの民族的アイデンティティ，そしてまた自らの存在意義を常に確認していた。スポーツ活動は「日系人」のアイデンティティ形成に大きな影響力を持ったと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は『布哇殖民新聞』,『布哇報知』,『Honolulu Advertiser』という同時代の新聞を用いて日系人のスポーツ活動の動向と実態を明らかにし，スポーツ活動が「日系人」のアイデンティティを形成してゆく重要な文化的要素であることを実証した点で，高く評価できる。この論文は 1908 年から 1941 年にわたる日系人とスポーツ活動の数量的因果関係を明らかにしたが，今後，より詳細なスポーツ活動の記事分析を補うことにより，より精度の高いハワイ移民スポーツ史を書き上げることが可能となる。それ以上に，本論文は未開拓な領域であった「移民スポーツ史」一般における，注目すべき第一歩を印した研究であったと評価できる。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。